

小さな日仏交流

ドイツ、ルクセンブルク、ベルギーに国境を接しているフランス北東部、ロレーヌ地方を訪ねた。ジャン・クロード（65）とジゼル（60）は、この地方の小さな村でレストランを営んでいる。ジャン・クロードの姉を通して知り合った2人は、しばらく家族ぐるみのつきあいにとどまっていた。「彼女につかまっちゃった」と笑うジャン・クロードをにらみかえすジゼルがほほえましい。



2人が出会ったのは、この地方の中心地メッス。シャガールもかかわったステンドグラスで知られる大聖堂がある。その昔、交通の要衝・重工業の町として栄えていたメッスだったが、ジャン・クロードの青春時代には斜陽になっていった。現在は、新幹線TGVが開通し、町をあげて歴史的建造物を修復したため、国境を超えて多くの観光客がやってくる。

1964年、20歳をすぎたある日、ジャン・クロードは「柔道の本家で黒帯をとろう」と思い立ち、柔道仲間に声をかけた。当初、10数人で日本に向けて旅立つ予定だったけれど、約束の場所に姿をあらわしたのはジャン・クロードと友人の2人だけ。アルバイトで貯めたお金で古い軽トラックを買って、東に向かって旅立った。

ジャン・クロードのパスポートには、イタリア、旧ユーゴスラビア、ブルガリア、トルコ、革命前のイラン、パキスタン、アフガニスタンなどの出入国スタンプが残っている。途中、資金が尽きてパキスタンで数週間アルバイト。インドで船に乗り込み、マレーシア、カンボジア、ベトナム、香港、神戸を経て横浜港へ。メッスを発って2ヶ月後のことだった。



ジャン・クロードがいまでも大切にしている当時の新聞記事の切れはしを見せてもらうと、横浜の朝飛道場で稽古に励んでいた様子が伝えられている。知り合いもなく、日本語も解さないので、よく道場にたどりついたものだ。ある日、老齢の元警察官が、流暢なフランス語で話しかけてきた。いまでも「ニッポンのパパ」と呼んでいるこの恩人との出会いにより、住居を世話

してもらい、皿洗いや簡単なモデルなどのアルバイトで生活費を稼ぎ、2年かけて黒帯を取得し凱旋帰国。

目的を達成してメッスに戻ったジャン・クロードに、友人たちや家族は敬意を表した。日本人女性たちとの浮いた話は数知れず、地元でも人気者だったが、ジゼルと1971年に結婚。以後40数年、メッスに近い小さな村のレストランを2人で切り盛りしている。日本で世話になった恩返しとして、日本から修業にやってくる若い料理人たちを迎えては、彼らの旅立ちを温かく見送ってきた。

今年の日仏修好通商条約締結150周年。この間、こんなささやかな日仏交流もあった。

(mainichi.jp 2008年4月8日 掲載)